◇究める道を求めて◇ 147

「くにまもり」をつくり上げていく

株式会社 キャリアコンサルティング
代表取締役社長
室舘（むろだて） 勲（いさお）

聞き手
矢野 弾
（矢野経済研究所特別顧問
潮流社社長）

室舘　勲 氏

――「しがく決起会」が十周年を迎えられました。おめでとうございます。椿山荘に、志ある二十代、三十代の若者が四百名も集まりました。回を重ねるごとに参加者が増えておりますが、その要因の一つに「くにまもり」というテーマがあるのではないでしょうか。

室舘　「しがく」に学びにきている方のなかでも、日本を良くしていこうという想いに共感してくれる人を選りすぐって始まりました。「くにまもり」という具体的な言葉を掲げたのもこの時期です。まだまだ、日本が良くなっているという実感が無い状況ですが、特に、民主党政権の三年三ヶ月は、「このままでは日本がどうなるのだろう」「日本のために何かしなければ」という意識が広がっていきましたので、そこに「くにまもり」というテーマが重なったのではないかと思います。

――第二回から故中條高徳先生も参加されました。いまの社会は、人づくりが必要だと言われながらも、人づくりが出来ていない状況です。中條高徳先生の、若者教育をされている室舘社長への期待、しがく決起会に対する想いも強くなっていったのではないでしょうか。

室舘　中條高徳先生は、陸軍士官学校に入校した元軍人であり、アサヒビール株式会社で副社長、グループ会社で会長を歴任された方です。そういった方が、しがく決起会に参加している若者と触れて、彼らに期待をしてくださったことは、非常にありがたく感じています。中條先生は、日本の末永い繁栄を望まれていました。だからこそ、いまの日本の礎を築いてくださった方々が祀られている靖国神社に毎日参拝されていたのだと思います。そして偶然にも、私たちは中條先生と出会う前から、毎年一月三日に靖国神社での集団参拝をしておりました。

――参拝にも多くの若者が集っておりますね。

室舘　先人に感謝を伝えに行こうと、今年は八百二十名もの若者が集まり、来年で二十回目となります。そういったところから、中條先生の想いとも重なり、志を託していただいたと感じています。私自身も中條先生が毎日されていた靖国神社参拝を引き継いで、東京にいるときには毎日参拝しております。参拝するたびに、中條先生のお顔や言葉を思い出します。

――中條先生は民族が滅びる条件として、「理想を失った民族」「心の価値を失った民族」「歴史を忘れた民族」と話されていました。

室舘　くにまもりを考える上で、理想、夢を持つことは、経済が活性化することにも繋がると思いますから、とても大事なことです。まずは国民一人ひとりが生き抜いていくことが必要なので、お金を稼ぎ、衣食住が守られること、まずは自分が自立することが大事です。大学生の就活支援をおこなっていますが、二〇一七年三月に卒業した大学生五十六万人。その内四万四千人が就職も進学もしていないというデータがあります（文部科学省「学校基本調査」）。意外と仕事をしていない人が多いのです。社会に出る一歩目でつまずくと、なかなか社会に順応できない状況がまだまだありますから、国を担う役割としては理想を持って生きることは重要だなと実感しています。

――立国とは公にあらず私なり、福沢諭吉の言葉です。

室舘　そして、家族の大切さ、育ててくれた学校や公共施設など、地域、公への感謝が必要なのです。「自分、自分」となっている思考から、「自分＋社会が大事」という意識に変化するためには、何をどのように伝えればよいのかを常に考えています。

――国に対して誇りを持たせる教育も出来ていないのが現在の日本ですね。世界に、二千年以上続いている国は日本しかありません。そういうことを多くの日本人が知りません。

室舘　その通りですね。皇室を中心として、日本は脈々と歴史を紡いできました。ここ数年は年間二百人以上もの大学生に皇居勤労奉仕を紹介していて事前勉強会をするのですが、最初は皇室のことをほとんど知りません。

――ご譲位の議論で国民が皇室に心を寄せていることが明らかになりましたが、伝えるべきことはまだありますね。

室舘　やはり歴史教育が重要なのですが、授業では年号と出来事を暗記することがメインになっていて、歴史が好きだという人は多くありません。そこで、弊社では「歴史に学ぶリーダーシップ講座」という歴史上の人物に焦点を当てた講座を展開しています。人物に焦点をあてると歴史が映画やドラマのように見えてきます。その人物の時代背景、前後関係に興味を持ちやすくなるのです。

――占領政策が影響していますね。憲法改正に関しても機運が上がってきたように感じます。米国の政治家であり、元駐日大使のマイク・マンスフィールド氏は、一九九九年九月八日付の日経新聞「私の履歴書」で「日本国憲法は紛れもなく、米国製である」と証言していますから、米国製の憲法をお返しして、自前の憲法を制定していくことがよいのではないでしょうか。

室舘　大日本帝国憲法が作られた過程を調べると、日本国憲法が作られた過程とは百八十度違うことがわかります。だからこそ、憲法を変えるか、作るかしかないと思います。憲法を変えるとなれば国民の過半数の同意が必要になります。しかし憲法に関しての知識が、日本全体で薄いのが現状ではないでしょうか。この状況下で憲法改正を進めていったとしても、本当に日本にとってより良い憲法になるのでしょうか。有識者が作った憲法を、国民投票という形で審義をしても、正しいことを正しいと言える、逆に悪いことを悪いと反論することができるのかということを懸念しています。憲法というものがどういったものなのか、国民に対して大きな視野で教育していく必要性を感じており、憲法改正の問題はこ

こからだと考えています。

――政治家でも憲法改正の話をする以前の状況で揉めていますね。

室舘　今回の第四十八回衆議院議員総選挙では、十八、十九歳の有権者が百八十万人いたそうですが、有権者にどれだけの知識があり、どういった価値観を持っているかで議論のレベルが変わります。例えば自衛隊に関することもそうです。いわゆるグローバルスタンダードで自衛隊を見たら、海外では「軍隊」という認識です。世界各国、自国を護るために軍隊を設置しています。しかし、日本国内では「軍」という言葉が出るだけで、議論すらできない状況に陥っています。軍を持ったら戦争になるという意見もありますが、本当のところはどうなのだろうかを話し合えないのです。国の在り方、国防の在り方など、正論を話していても、必要以上に反対の声を荒げて、まともなことを、普通に議論できない状況です。

――これは国とは何かを歴史を学ばないと真物（もの）になりません。

室舘　まともなことを議論できないから、言論人も縮こまっているのが現状です。全体を見ることもなく、ほんの一部分の言葉尻を叩いてくるので、快活な議論ができません。何かあればアレルギー反応を起こして、思考停止してしまうような、間違った平和主義が横行しているようにも感じます。まずは、議論ができる土壌をつくっていかなければなりません。

――メディアがジャーナルをもち、まっとうな報道をしていかなければなりませんね。

室舘　メディアの影響は大きいです。政治家の個々の資質もあるでしょうが、それをこれでもかと煽った報道ばかりしているから、国や政治というものから関心が離れてしまいます。例えば、身近なところで、なぜ野球選手やサッカー選手が憧れの存在になるのでしょうか。多くの報酬をもらいかっこいい。そして、キレイな奥さんと結婚できる（笑）。そういう報道が多いからこそ、子供たちも憧れるのだと思います。では国を動かしている政治家や官僚はどうでしょうか。政治家がメディアに出れば、叩かれてばかり。一緒に、官僚も同じような扱いを受けている。そんなことで、政治家に憧れる人が出てくるでしょうか。官僚となり、国のために尽くそうと思う人が出てくるでしょうか。本来、永田町や霞が関で働くべき優秀な人材が、最近は財界に流れていると聞いています。

第10回しがく決起会にご参加いただいた来賓の先生方

――理想が必要ですね。どのように日本を想う若者を育成していくのですか。

室舘　日本を良くしていくためのポイントは、日本を良い国だなと思える人を増やしていくことです。日本を好きだなという人を増やしていき、各々が実力をつけていく。そもそも実力が無ければ、日々の仕事をこなすだけで終わってしまいます。だからこそ、人間力、知識、実力がある人が、社会のためにと行動していく。身なりも大事です。実力があって、パリッとした大人を見て、後輩が憧れるのです。かっこいい大人が「日本って良い国だな」と語れば、後輩たちもそんなものかなと自然と

真似していきます。

――憧れられる大人を育成していくのですね。

室舘　五木寛之先生が「手本と見本」という話をされていました。手本というと少し遠い存在のように感じますが、見本というのは、自分でも頑張れば届くのかなというレベルのことだそうです。二十代、三十代のなかで実力があって、日本を好きだなと言う人を増やしていけば、彼らが見本となり、年の近い後輩たちを自然と感化していくと思います。今回のしがく決起会でも結婚された人も来ていましたが、子供がまず真似をする存在は、お父さんとお母さんです。親が公を考えて生活をしていれば、自然と子供にもその価値観が伝わります。将来、どこの学校に進もうとも、就職先がどこであろうとも、大切な部分は引き継がれていくわけです。そういう流れを作り、三世代先、四世代先へと繋いでいきたいと思っています。

――それこそが中條先生が室舘社長に託した志なのではないでしょうか。

室舘　どんなに優秀な人材を作ったとしても、自国のことが嫌いなら、自国を護ろうという気持ちは出てきません。人材が海外に流出していきます。これは日本だけの問題ではなく、世界各国で起こっています。交通インフラや食料など、住みやすい場所を作ってくれた先人への感謝が大事です。それは身近であれば、親であったり、先祖であったり、学校の先生であったりするのです。そういった感謝があれば、自分の住む地域への愛情が変わってきます。だからこそ、歴史を語り、どれだけの想いで先人達が日本を大切に繋いできてくれたのかを伝えていく必要があります。そして、私が語るだけでなく、見本となる若者が語っていくことが大事です。そういう舞台として開催しているのが、二〇一八年二月十一日に十回目を迎える「くにまもり演説大会」です。

――毎年拝見しておりますが、まさに志を引き継いだ青年たちが、実践していることを熱く語っています。しがく決起会とくにまもり演説大会が、青年たちの心掛けを作る両輪となっていくと実感を得ています。

室舘　私も四十六歳となり、働き盛りと言われる世代です。いままさに、中條先生のような諸先輩方から、タスキを受け取り、次世代に繋いでいくために、必死で走っている最中です。マラソンでリタイヤする人と、駅伝でリタイヤする人の悔しがり方は全く違います。それは、それまで繋いでくれた人たちの努力が汗となって、タスキの重みが増しているから、悔しさの度合いが違うのです。だからこそ、私もこのタスキの重みを感じ取り、しっかりと次世代に託し、繋いでいけるように努力していきたいと思っております。

――日本のために頑張っている室舘社長にさらに充実と活動を念じてやまない心にたっています。ありがとうございました。

■むろだて・いさお■
一九七一年　青森県むつ市生まれ。
二〇〇三年　株式会社キャリアコンサルティングを設立
二〇〇八年　第一回しがく決起会を開催
二〇〇九年　第一回くにまもり演説大会を開催
二〇一三年　リーダーシップの基礎を身につけるための教育機関「しがく」を設立
フジサンケイビジネスアイ・産経新聞社主催「日台文化交流青少年スカラシップ」審査員
致知出版社「東京都社内木鶏経営者会」会長
著書に『「応援される人」になりなさい　アウェーがホームになる〝人間力〟』（WAC）、『まずは上司を勝たせなさい』（講談社）、『夢を見て夢を叶えて夢になる』（致知出版社）などがある。